

茶話會上寮生一般への教示： 雑録

著者	？本， 植
雑誌名	龍南會雜誌
巻	7 6
ページ	1 6 - 2 6
発行年	1899-12-23
その他の言語のタイトル	茶話会上寮生一般への教示： 雑録
URL	http://hdl.handle.net/2298/5447

墮落の境界に沒了せず俯仰天地に愧ぢざるの人間か、軀の大小と壽の長短及び其腐爛元素の犠牲に供し一片の土か又は極微に歸すも亦何ぞ意に介ま之を悼み之を憾みむ是れ天則にあらざるや

雜 錄

茶話會上寮生一般への教示

今夜は、拙がこの學年に入りてよりこのかた、いまた一般の寮生諸子に對えて、篤と談じたることもなく、且一堂に會えたることもなきによりて、先一場の御話をいたし、并せて學寮一般の親睦を結はんため、この茶話會を開きたる次第なり、實はこの學年の始に、入寮式を舉行せんつもりなりとかども、比は、室長室長補も揃はず、何かと準備中に、月日を費すほどに、各室の茶話會などとはじまり、別に入寮式を行ひて、新舊兩生の會見を行ふ必用もなくなりたれば、その方は舉行せざるとぞて、今夜の茶話會とはなりしなり、

既に入學式にも、校長より、生徒の心得につきて、一々その要領を指示せられたる通りなれば、拙に於ては、最早申す所も是なく、今日寮内を巡視するも、各室の清潔整頓、よく行届きたるは、室長室長補の盡力にもよるべく、寮生各自の心掛にもよるへしと存して、拙どもの大に満足する所なれども、とかく慾目といふとのありて、尙一層の寮風を作出たまとの念は、日夜夢寐にも忘れざる所なり、殊に昨年九月入寮式の日、寮生の心得を、七ヶ條掲げて、申置たる事もありて、その條條は、既に同年十一月發行の龍南會雜誌第六十八號に載せたれば、舊生徒の方は、とくにしるるゝ

所なれども、新生徒の方には、未だ存知なきことなれば、今夜この席にて、さらに老婆の繰言のやうに、いはざるをえず、是は拙が職務としてやむをえざる所なり、且時勢風氣のおし移るにつきて、一言えれかざるをえさるゝともあり、さりとて、學術上より理窟をいふにもあらず、元來この寮は、學術をのみ考究する所にはあらず、學理の實行場なれば、これを實行するにつきて、いはゆる老婆の繰言をくりかへして、新舊の寮生諸子一般に望むなり、古人もいへるとく、理窟は、三尺の小兒もよくいへども、これを行ふにいたりては、六十の老翁も、小兒に同き、願くは老婆の絮言とせず、拙か申す所につきて、各自工夫修養ありたき者なり、

さてその七ヶ條の條々と申すは、第一は、自制法なり、元來我國教育の線路には、二大線ありて、同きく帝都輦轂の下より發す、その一は、直轄學校、一は全國公私の諸學校是なり、此二大線路をゆく生徒のうへには、自然長幼先後の別ありて、吾直轄學校の學生生徒は、長者たり、先進たり、他の公私諸學校の生徒は幼者たり、後進たり、幼者たり、後進たる者は、何事にも、長者先進の手ぶりを見上見習ふといふは、自然の情なれば、苟も直轄學校の學生たる者は、何事にも、先導者となりて、其模範を示さるゝるをえざる任務を負へるとは、復た多言を要せざることなるへき、しかるに、動もすれば、長者は幼者に教へられ、先進は後進に制せらるゝやうの左きひになるは、浩歎の至なり、まからば、何をいたして、其模範を示すことをうべきかと申すに、風紀節制を嚴にするに如くはなし、是によりて、學校にも、夫々手を盡さるゝ事なれども、只外部より節制を加ふる共に、その効果を奏するものにはあらず、これ先自制法を行はざるをえずと、正面より説出さるゝ所以なり、殊に寮生諸子は、我寮風の源泉なれば、先寮生より自制法を行へらいたまて、かくは寮生

の心得に申えき次第なり、然る處、今年文部大臣が改正條約實施の詔勅に對て奉りての訓令に『若し學生々徒に於て放漫自制せず云々』と反面よりこの文字を掲て、開口訓令せられしは、拙の尤悦ぶ所なり、猶大臣は、その自制せざる者の種類を列舉して申されは、今日の時弊風俗に切中する所もあれば、これに付ても、一言申れくへし、それは、今日の生徒には、なべて一の陋習あり、いやまきくせなり、一は禮節を輕視するもの、一は粗野の行を敢てするもの、一は奇矯自喜ふものはなり、禮節を輕視するは、維新以後の流弊にて、今日老人の風と青年の風とをみても、盡然その風を異にし、一は禮節を重んじ、一は禮節を輕するは、爭ふへからざる事實なり、是維新の際にたち老人の、徳川の末造を見て、これを打破したる破壊的の末弊にして、いはゆる寸を矯めて尺を曲けたりといふ譏は免れず、夫れ今日外國人に接してみても、その禮節の正しき、自然自恥づる所なきにしもあらず、されはこの弊にして矯めずんば、畢竟は、國家の威信にも關する所、少小ならずとおもはる、是特に大臣の訓令せられたる所なるへき、そこで、此寮に入りたる人々は、萬事の規律を重んじ、禮節を尊び、人に逢ては、必敬禮をえ、事に當りては、必慎重にえ、遊ぶ時は、出てゝあそび、歸る時は必歸り、起くる時はおき、寝ぬる時は必いね、書籍衣類、夫々始末整頓、聊も亂雜にせず、何事も見苦しからぬやうになさるへし、昨年卒業せし特待生内丸最一郎の如きは、能く自制法を行ひえ者にや、出入一律、一度の欠席もなく、學寮課員を煩はしゝともなく、これによつて、終に校長より褒詞を賜はり、非常の名譽をかさねて、此校をさりしは、自制の効なるへし、拙もこれに感して、詩を賦えて遣したり、人苟も自制をだに務むれば、禮節もたのつから行はれ、禮節行はるゝ時は、衛生の道にも叶ひ、武勇の藝ともなり、百行の美は、これより生ずるなり、其人

を化するも、これより大なるはなま、我右の詩を西屋大尉に話し、大尉腰より扇をいだし、之に書てくれと申さる、よりて書て遣はし、豫備將校にその話をし、歸縣の時、名々に拙か詩を書きとらせま、とあどよりの話なり、この風をさゝて興起するもの、必あるとなるべき、善行の波及するも、また速ならずや、すへてかやうの善行は、みな禮節より生ずるなり、禮節は、その身に常度をたつるなり、人と同道するに、三度も四度も御先へといふは、非禮の禮にして、一言の挨拶もなきは、不届なり、取るべきをとらぬは、非義の義にまて、取るへからざるをとるは、泥坊に近ま、この邊の差別もなく、とかく過不及の過あるは、よの常の陋習なり、この陋習を帶ふる者は、特に都會の惡風に染みたるものに多きやうなり、今此の學校などては、尤この陋習を脱却し、教師その他の職員にあふ時は、必敬禮をすべきなり、然るに、近比は職員に朝夕あひても、一向に禮せざるものあり、新舊生徒の間にて、禮せざる者ありときく、是らは次第に都會の惡風にうつりゆく人の多きにや、風俗の澆漓に赴くことは、日一日と甚しきを覺ゆるは、歎はしき義なり、この寮にある人々は、よくこゝに意を留めて、各自世道人心の頽波を挽回せられんこと、拙の切に望む所也、次に粗野の行を敢てするもの、是たゞ變習にて、惡意あるまじけれど、譽めたるにはあらず、されはとて、美服をきよ、体裁を作れよとは、いわぬが、何日洗ひつらん覺えぬほどの物をきたる、すばんのさけたる、袴の綻ひたる、そのまゝに打はへてたちめぐる、學問智識あるものゝしわざにはあらず、畢竟はぶしやうものなり、質素とは、木綿衣を何度となく、洗濯きてきるをいふなり、臭氣をねばたるが、何の質素にかあらん、且廊下に痰を吐き、寢室に塵をため、これを見苦まとも、何とも思はぬやうなるは、皆粗野の行なり、また粗野とは、有形的の事のみにあらず

す、無形的事にも、粗野なるあり、精雅なるあり、質は粗にまて、人の用心工夫にて、いかやうにも精にしなざるゝ者なり、まかるを、その粗野なるとも、精雅にまなざるゝことも、知りながら、これを取てするが、宜まからずとなり、此陋習をたびたるは者は、田舎の陋風になれたる者に多きやうなり、尤この熊本などは、いかに美しくせんとすとも、叶はぬ點あり、それは、天然なり、肥後は暗い、筑前は明るいといふやうのこゝちする、土地まからしむるなり、されども是も自制法を務むれば、天然にも勝るゝなり、天然すてに粗野なれば、益人力を用ふべきとなるに、天然が穢なしとて、人も是になびくは、勇者の志にあらず、この察にある人は、人々率先まて、粗野の行を改め、町へいでゝ物をかふにも、人の内にいるにも、自家の自制法を以て、彼はあするもの、是はかうするものと、教へて遣すことなり、これでこそ教化の本は、學校より出づとはいへ、陋に坐して陋に染み、野にありて野に隨ふやうにては、學問のかひもなきなり、能々心を用ひて工夫あるべし、その次は、奇矯白喜ふもの、これも田舎に多し、奇矯も、時と場合とによりては、必要の事なり、いはゆる權道なり、時勢の積弊をためんには、この權道を用ふることなり、されども常境にありて、常道を行はず、却て權道を用ふるは、用所を失ふなり、人は時所位の三ツを知るが、大切なり、これをまちがへたる時は、彼是皆非なり、髪はねぬることく、ふるまひは氣違ひのことく、やしなき處にあたり、人どあらがうて喧嘩をもどめ、人のいぬる時におき、人の休む時に働く、すへて冠履倒置の行するものは、只その人一人の得意がる所にまて、誰も譽めはせぬとあり、平生の行で、難戲とは、もとく異なり、遊戯には、色々の氣違ひきたることとして、人を笑はかすべま、平生の行は、何となく氣高き所あるべき也、學問なき人は、萬事下むさにて、野舉なり、疎放なり、今

此案にある諸子たちは、萬般の學を修むることなれば、何とか向上の行なくて叶ふべき、先此三種は、大臣の訓令せられし所にして、自制法のよき注脚とれもひたれば、こゝにくるかへまで申置く也、これを要するに、自制法は、心猿意馬を制し御する也、何事にても、いやでたまらぬ、したくてたまらぬといふとに、うちから、をさへつくるなり、男兒も、到此是豪雄と申すへぞ、

第二は、貨色なり、貨は金錢なり、物品なり、尤大切になさるへし、いつれも、父兄より粒々辛苦をておくり下されし物也、且寮内には人手の少くして、監督の行届かざる時もありて、いかなるものゝ入こまぬともいはれされは、銘々に用心はありたき也、人に盜心はなからんども、道にわたるるを拾はんとするは、俗情なる故、金錢ほど、人を惡人にするものはなし、人心は、首にかけたる人形箱、鬼をたそうと、佛をたそうと、といへるがごとし、故によく始末まで、爲替にてれり來らは、直に食費等を納め、使錢を殘まであまりは、學寮課に預置くへし、食費の滞納は、尤寮生たるものゝ不心得にて、一般の迷惑いふ斗なぞ、只人に迷惑をかくるのみにあらず、この事をし、さておとにて、といふうちに、わすれもぞ、紛失することもなきにしもあらず、人をも身をも恨みざらまじとはいへども、金錢はかりは、恨のたねならざるはなく、また使ひやすきはなぞ、要するに、錢をもたぬが、上策なり、手にとめれなくゆゑに、菓子もかひたくなる也、畢竟は食費の滞納ともなる也、また日用品や、菓子とても、錢もたすまで買ふへからず、商人といふものは、氣のよはきものにて、いかばかり金拂はすとも、いやな顔もせず、かひに行けはうる也、殊に當地なとにては我様の帽子をだに見れば、直に信用して、金わたさすとも、みたりにうり與ふる習あり、これは、甚寮生諸子の爲めにならぬこと也、よくこれにあまへて、かふへからず、一切の事、

人を待まぬが簡要なり、忘るへからず、色は女色の事なれども、拙のいふ色とは、すべて目うつりして心を動するものをいふなり、これに對えて、戒慎するが克己の第一義なり、そのうち、飲食男女には、人の大慾存すと申して、これを分ては、飲食は上の貨に属え、男女はこの色に属す、世には、これより利の大なるはなく、またこれより害の甚しきはなえ、今寮生諸子のうちに、この女色を好むものあるへくもあらねは、好むへからずと誠しむる故にもあらず、たゞ若き者は別えて嫌疑の地にたつへからずと申すなり、當地は、古來男の頃に女をわかさりしより、青年の習は、よくに變りぬれども、老人の癖は、むかえに變らず、夜の夜中にも、大切なる一人娘を外にいたす習ありて、今に遺れり、甚た宜しからぬ遺習なれども、一朝に改むへきにもあらざれば、此方に於て用心すべきことなり、故に他日萬一病氣事故にて、下宿すども、決えて若き女などのある家に下宿することは、かたく避けらるへえ、女と談すべき事あらは、年の老弱を論せず、襖をおえひらきて對すへし、高聲にて談することなり、女の聲の細きにつれて、男の聲の細くなるは、よのつねなり、是は剛の柔に化するといふものにて、甚士君子の忌む所也、これらの心得は、父兄より聞かれしこともなかりきや否や、よくよく用心あるへし、先頃拙が宿りし家に若き軍人一人あり、克己の精神といふ論を草して、自勵めり、そのうちにも、この一條を掲げて、みつから制せり、いともゆかしく覺ゆれば、一言吹聴す、みなくかくありたえとおもふ故也、

第三は、學寮を自家とおもふと、是はすでに、校長も御話ありえとく、愉快にくらえて、學問なさるへし、學問に倦まば、窓外の大庭にいでて、天地もひいけと運動するが第一なり、運動に疲れは、机上の瓶に草花でもさして對すべえ、すべて紀律整齊のうちに、優遊自適する所あるがよえ、

窮屈にれもふへからず、紀律は窮屈にするにあらず、整頓法なり、いつてに居ても、せねばならぬこと也、それも初は随分骨の折るゝやうなれども、習ひおふせは、たゞ者なる也、こゝろの欲する所に従て、矩を踰えすとは、聖人の極致なれども、修行すれば、誰にてもその趣あり、是を天人一致といふ、

第四は、清潔法なり、今年よりは、夫々壁もぬりかへ、食堂もたてまし、空氣の流通をよくし、風は入れども雀は入らず、到る所随分改良せられし故、いつも新なるやうに、汚したり、傷つけたりするやうのこと、萬々あるへからず、萬事穢なくするは、我住家を穢なくするなり、美しさ所にするみたきは、人情ならずや、決して人の物とれもふへからず、する間は、我か物也、諺にもいへることく、鷹は饑ても穂をつますとは、志士の心なり、鳥たちてあどを濁さすとは、君子の行なり、拙どもゝ、及はぬながら、この地に來て、數度宿がへをしたれども、家に傷つけたるゝも覺えず、たち去る時は、必ず掃除して、一點の塵も残さぬなり、あどはしら波とたちさるは、忠恕の道に叶はすとおもへばなり、食堂などは、殊に汚れ易き所なれば、食事の際、あらぬ所に、汁をこぼし、菜をおとし、あどにきて給ふる人のむねわるくするも、思はず、あひるの餌をくふやうにするは、人の行ともれもはれず、禪家には、百丈清規しんぎと申すものあり、百丈山大智海禪師のたてられしなり、是によりて、支那の五山も、我國の濟洞も、みなその清規によりて、僧堂をたて、威儀をも設けたるなり、故に百人の雲水が食につくども、五六人の食するがごとし、この通りには、ゆくまじけれども、少しく斟酌して、食堂清規を作りて掲置たしと、拙はれもふなり、その他、不淨地などは、いふに及ばず、是も禪家の不淨所をは、東淨西淨と名づけ、手水鉢の杓に清の字をかくなど、皆古

人深意の存する所なり、合點せられ候や、一切清潔の民とならるへし、清潔の地には、子々も何もたぬものをや、

第五は、内外表裏なき行、夜の行と晝の行とを違ふへからず、晝は路を通り、夜は垣を踰ゆるなどいふやうにては、第一我心の間は、いかゞ答へき、消燈時限に至らば、必消燈と、寢室の内へ持ゆきてかくしなくては、人情なれども、是も士君子の行にはあらず、士君子の行は、陰もなく、日向もなき、殊に書生の間は、澹泊なるがよし、うしろめきた所爲は、萬事わろし、白日青天、十字街上に仕事するやうの氣象あらまはさ、

第六は、自重の精神、是は何事にても、我手にかけてするこゝろなり、責任を引きかつゝ義なり、寮内にある人たちが、みなこの心になれば、塵もたまらねは、亂雜にもならぬなり、萬事出来ることは、人にゆだねへからず、人のすることまでも、みつからする氣になるが、他日國家の大任を負荷して、肩も折れねは、腰も曲らぬ大丈夫となるなり、

第七は、共同心、寮生は一の團體なり、熊本もなければ、鹿児島もなく、筑前も、久留米もなきなり、務めて他郷人によく交りて、その益を受くへし、むかし徳川時代の儒者たちが、東西に門戸を張り、互に相唱和え、講習し、以て當時の文明を鳴えは、大かた東は江戸の聖堂、西は龜井の塾、廣瀬の塾にて、交を結ひしなり、その益友は、却て他郷人に多かりきは、他山の石もて我玉を磨きま也、とかく所變れは、その見る處も違ふなり、熊本人斗にては、熊本の習氣は、わからぬなり、故に物は同をもて聚り、異をもて成すとやらの語もあり、病氣事故にて、人手を頼むは、先同郷人なれば、同郷人の相親しむべきは、もとよりなれども、同郷人なれば相親み、他郷人なれば相親

まぬといふやうにては、誠に同量のせまき話にて、つまり損の道なり、かやうにては、到底社會に出て、萬國の人と相謀るとあたはざるなり、殊に何か争ひ事の生する時に至れば、忽ち各一方に集りて、是非を顛倒するやうに至るは、俗情なり、寮生諸子は、この俗情を超脱して、輔仁の道を講すへき、是まで各室にて、茶話會を催すとなるが、そのやうの時は、互に各地郷里の物語を、各その聞かざる見ざる所を見聞するも、またはれ智識開發の一端なり、また各級にて親睦會をえても、務めて酒を用ひす、すますがよし、惡行の本を尋ねれば、皆酒なり、元來、眞の親睦は、酗酒淫樂の間にあらず、故に何事も質素にして、騒々しからず、苦茗一碗、粗菓一盂、超然他の俗輩を出て、以て心交を求めらるへき、その他かねて揭示して訓戒えたることもあれども、未だ止まざるは、口笛、疾走などの兒戲的行なり、嘸々他の人々の迷惑となることなるべし、是等も、その人にして、苟も共同心のあるならば、かゝる兒戲的行は、あるまじきなり、物音にも、耳にたつあり、たゝぬあり、耳にたゝぬは、やむをえざるに發するなり、耳にたつは、やむをえてやまざるに發するなり、口笛をふく、あわてゝはしる、戸を開つる聲のかしまき、人の沉思をみたり、人の安眠を妨くる一方ならず、是やむをえてやまされはなり、かの水の聲、鳥の聲の耳にさわらぬは、やむをえざるに發すればなり、一は無意なり、一は有意なり、有意無意によりて、人の愛憎分る、何とぞ今後はかの童心といふもの除きて、もらひたき、童心の除かざる間は、決えて共同心のおこらぬものなり、すべて諸子たちはみな君子の徒なれば、萬事安詳にきて躁急ならず、只々人の爲め、校の爲めとおもひ、善にならひ、惡を導き、ともく一致協同きて、寮規を守り、校風を養ひ、以て内は他の學校生徒の模範となり、外は外來人の儀則ともなり、國家の威信をも墜さず、本校の

体面をも汚さるやうに、心掛あれかまど日夜拙か希望する所なれば、賤のをた巻くかへて申すなり、よく／＼体認せられたし、

巳亥十一月二日

舍 監 黒 本 植

琉 球 (承 前)

○風 俗 (上)

教授 武 藤 虎 太

沖繩の風俗に關しては、記述すべき事甚多し。然れども、其大部分は、内地に於けると全じ。今其見聞せる大要を擧ぐべし。

《一》冠婚葬祭^{△△△} 凡そ男子十二三歳《久米村にありては拾五歳》に至れば、嘉辰令節を期し、片髪を結ばしむ。當時冠者は、禮服を着し、烏帽子を穿ち、祖先の靈位を拜し、《久米村は孔子廟をも參拜す》終て酒宴を開き、親戚朋友等を招き、祝儀を爲すを例とす。

結婚は、一般暖地に於けると全じく、早婚なり。先づ男子四五歳乃至六七歳に及べば、父母は他日其の妻たるべき者を撰び、媒介を以て、其父母に結婚の約をなし、吉日を卜して、聘財を婦家に贈り、斯て男子十五六歳乃至拾八九歳に至れば、饋道吉日を撰び聘物を具へて、婦家に送る。當日新郎は、朝衣冠《大禮服》を穿ち、婦家へ親迎に赴けば、婦家よりは、途中迄竹馬破傘等を備へ送り、新郎を之に乗せ、鉦鼓を鳴らて之を迎ふ。